

発情上司と同居中！

Nana & Takayuki

藍川せりか

Serika Aikawa

termity



エタニティ文庫

目次

発情上司と同居中！

5

書き下ろし番外編
恋に落ちた上司は、
激しく発情する

311

発情上司と同居中！

プロローグ

誰にでも、人に言えない秘密が一つくらいあると思う。

私、伊藤葉々いとうななは、週末一人で家にこもって海外の恋愛ドラマを見るのが密ひそかな趣味だ。そうして、自分に足りないトキメキをチャージしている。

ドラマに出てくる長身のイケメン。セレブで、ヒロインに一途な彼らに胸を高鳴らせ、寝不足になるのもいとわない。

ドラマを見ている間、ヒロインになりきって、全力で愛されるのだ。

あ、今、だいぶ痛い人だと思ったでしょ。

そうなんです。私は、二十五年間彼氏ができたことのない未だ新品女子。軽くこじらせている自覚はある。

でもいいよね。他の人に迷惑かけていないし。

友達ならそこそここにいて、仕事も真面目に頑張っている。離れて暮らす両親に仕送りもちゃんとしているし、コンビニのレジ横にある募金箱に寄付だっている。

清く、正しく、美しく……はないかもしれないけど、それなりに自立した成人女性を演じているのだから、一人のときくらいは好きなことをしたい。

他には、お給料日に新しくできたお店へ行って、美味しいご飯を食べることも決めている。

友達と一緒にいることもあるけれど、ほとんどは一人。

おひとりさまだって全然気にしない。職業柄、事前に店員さんと仲よくなっていることが多いせいとか、充分楽しめる。

というのも、私は大手酒造メーカーFRESH & EXCITINGのブランド戦略部に所属しており、しょっちゅういろいろな飲食店に行って自社製品を売り込んだり、自社のお酒の人気をチェックしたりする。その過程で、飲食店の人たちと仲よくなるのだ。担当しているのは、強炭酸が売りになっている『Punch』という名前のストロング系の酎ハイ。

去年発売した、まだまだ認知度の低いこの商品を、いかに売っていくか考えるのが仕事だ。

加えて、パッケージデザインや広告宣伝、販促プロモーションのプランニングなど、やることは多岐にわたる。

そんなふうにより甲斐がのある仕事をこなす私は、今年、二十五歳になった。

毎日充実しているものの恋愛方面は地味そのもので、未だに新品……もとい、ヴァージン。当然、恋愛経験自体も少ない。

海外ドラマの中の恋に憧れて、「あんなふう^にに告白されたいいな」とか「あんなふう^にに愛されたい」とか想像して楽しんでるけれど、現実には恋人すらいないのだ。

でも一応……好きな人はいる。

相手は、直属の上司である桐谷貴之さん、三十歳。

長身かつ顔よし頭よしのイケメンで、いつもキラキラオーラを放つステキな人。

仕事も完璧で、部下たちにも慕われ、真面目で優しい。

女性社員たちからの人気は絶大。密かにファンクラブがあるという噂が聞こえてくるくらいだ。

でも桐谷さんは、女性社員からどんなに熱烈にアプローチをされても紳士的にかわし、全く相手にしない。ものすごい美女が言い寄っても完全スルーだ。

可愛い系、清楚系、綺麗系、セクシー系、熟女系……たくさんの女性がトライしたけれど、全滅だった。

——なぜ……？

理由はわからないけれど、あれだけレベルの高い女性に言い寄られても断るんだから、私には全く可能性がない。

だって私は何もかも普通で、とくにコレといって長けてるものがないからだ。

そんな平凡女子がハードルの高すぎる男性に恋をして、早一年が経った。誰にも言うことなく想いを胸の内に秘めてきたけど、そろそろ限界を感じている。

桐谷さんに優しくされるたび、胸が苦しい。好きっていう感情が暴れ出して、もう口から零れそうになっている。

——いつか伝えられたらいいな。いや、伝えなきゃ。

桐谷さんにアタックして玉砕した人たちと同じ結果になることは目に見えているけど、気持ち伝えるだけならいいよね。

何もせずに諦めるなんて嫌だから、できることはやり尽くしたい。

……なんて、そんなことを思っていた。

なのに彼に、まさかあんな秘密があるなんて——

株式会社FRESH & EXCITING、ブランド戦略部第1グループ新商品ブランド担当。そう長々とした部署名が書かれた社員証を首からかけ、私は会社の廊下を歩いていた。

「伊藤さん！」

突然、背後から名前を呼ばれる。足を止め振り返ると、私の片想いの人——桐谷貴之部長がこちらに向かつてきていた。

「桐谷さん。お疲れさまです！」

「これ、ありがとう。早めに提出してくれて助かる」

桐谷さんの手には、私が作成した新商品開発会議の資料がある。

それは彼から昨日依頼されたものだ。早めに仕上げてくれと言われたので、優先的に作業して今朝メールで送信しておいた。

「お役に立てたなら、よかったです」

「伊藤さんはいつも仕事が早くて丁寧だから助かるよ」

「いえいえ、そんなことはないですよ」

私は焦って胸の前で手を振った。愛しの桐谷さんからお願ひされたから、つい頑張っちゃったんだ。期待に応えたくて、彼との仕事はいつも力が入る。

それに桐谷さんは私の努力に気がついて、こうして褒めてくれるのだ。それが嬉しくて、私はますます頑張ってしまう。

——私は、忠犬みたいに桐谷さんに尽くす、恋する乙女なのです。

そんな私に、桐谷さんは優しく微笑んだ。

「いつも頑張ってくれているし、今度うまいものをごちそうするよ」

「ええっ、いいんですか？」

「ああ、いいよ。好きなものを食べさせてあげる」

「わあ！ ありがとうございます、楽しみにしています」

こうして部下を喜ばせてやる気にさせるところがまたステキだ。

彼の手のひらの上で踊らされているのかもしれないけど、それでもいいと思えるスマートさ。容姿だけじゃなく、人として尊敬できるところがいっぱいで、本当に尊い。

ただ、桐谷さんはみんなに平等に優しいのだ。私にだけ特別ってわけではない。こうして度々、食事に誘ってくれるけど、いつも部署のみんなと一緒に、期待したようなこととは何も起こらなかった。

それでもいいんだ。同じ部署だから一緒にいられる時間は長いし、毎日彼と一緒に働けることがすごく幸せ。

もつとも彼は明日、有休をとっているので会えないのだけれど……それを思い出し、少しテンションが下がった。

「——そういえば桐谷さん、明日はお休みなんですかね？」

「そうなんだ、悪いな」

桐谷さんは月に一度、必ず一日だけ有休をとる。

毎月同じ日っていうわけではなく、曜日にもバラバラなのだけど、その休みの日だけは連絡がつかないと言われている。

うちの会社はプレミアムフライデーも取り入れている、福利厚生のしっかりした企業で、有給休暇を積極的にとらせてくれるので、桐谷さんだけ特別ってわけではない。けれど、彼の休みの取り方が珍しいので、私はなんとなく気になっていた。

たとえば私の場合は少しづつ取るのではなく、連休にまとまった休みをくっつけて超大型連休にしていた。他の社員も似た感じだ。だけど桐谷さんは月に一日だけ、しかも土日にくっつけようとするわけでもない。なんでだろう……

少し考え込んでみると、桐谷さんが心配そうに私の顔をのぞき込んだ。慌てて顔を上げると、彼が話しはじめる。

「何か都合でも悪かったか？」

「いいえ、大丈夫です。明日いらっしやらないんだなーと思っただけです。頼れる部長がいないと、ちょっと不安だなんて……」

私は急いで答えた。

これは誤魔化しとかじゃなくて本気で思っている。

何かトラブルが起きたとき、桐谷さんは迅速に的確な指示をくれる。そんな絶対的な信頼をおいている上司が不在となると、どうしても心細くなってしまふ。

「伊藤さんは、人を喜ばせるようなことを言ってくれるね。お世辞でもそう言ってもらえると嬉しいよ」

「お世辞じゃありません、心からそう思っています」

そう言うと、桐谷さんは私の頭をポンツと撫でてくれた。

「ありがとう」

——わああーっ！ 何、その爽やかなスマイルは！ 格好よすぎて失神しそう！

興奮で声を上げそうになるのを、ぐっと堪える。自然に緩んでくる顔を必死で引き締めて、私も彼に笑顔を向けた。

「明日はゆっくり休んでくださいね」

「ああ、ありがとう」

そう笑顔で応え、このあと会議があるということで、桐谷さんは去っていった。今日この瞬間だけで、今後一ヵ月分の運を使い果たしたかもしれない。まさか桐谷さんに頭を撫でられるなんて！

——桐谷さんの手、大きかったなあ……

男らしくて綺麗な指を思い出し、惚れ惚れとしてしまう。

自分の席に戻ったあとも、何度もそのシーンを思い出して夢心地で過ごしているうちに、あつという間に退勤時刻となった。

残業を少ししたものの、ある程度仕事に目途がついたところで、私はパソコンの電源を落として帰宅準備をする。まだ残っている社員たちに挨拶をし、フロアを後にした。

今日はまだ週半ばだし、明日に備えて早く帰ろう。

今日の晩御飯と、明日のお弁当のおかずの材料を買うべく、マンションの近くにあるスーパーへ足を運ぶ。

自分だけが食べるので凝った料理は作らないけれど、晩御飯とお弁当両方に使えるものにしてしよう。今日の特売品を見ながら材料を選び、会計が終わると自宅マンションへ直行した。

するとマンションの前に数台の消防車が停まり、散光式警光灯を点灯させ周囲を赤く照らしているのが目に入った。

——ええ？ 火事……？

野次馬なんてよくないが、私の住むマンションの近くだし——なんて思いながら、近づいていく。

マンションの入り口の前には、数人の警察官と消防士が立っていた。

——あれ……？ もう消火活動は終わっているみたいだけど、やけに騒がしい気が……

周りには人だかりができており、焦げ臭いにおいが周辺を包んでいる。

その人だかりをかき分けてマンションの前に立つと、見慣れたマンションが黒焦げになっていた。私は呆気にとられて、呟く。

「嘘でしょ……何コレ？」

目の前の光景が信じられなくて、頭の中が真っ白だ。

——これって……火事だよな？ まさか、うちのマンションが火事になったの？

こんな信じられない！ つていうか、信じたくない!! こんなことが起きるなんて不運すぎない？

何かの間違いであってほしいと願うだけで、全然思考が回らない。

状況を受け入れられず、現実逃避をしながらぼんやりマンションを見上げていると、近くにいた警察官に声をかけられた。

「あの、こちらの住人の方ですか？」

「あ、はい……そうです。301号室の伊藤です」

「301号室！ よかった、無事だったんですね」

「あの、私、今帰ったばかりで……これってどういう状況なんですか？」

警察官に質問すると、彼は状況を説明し始めた。

「隣で火災が起きまして、その火がこのマンションに移ったんですよ。今、住人の安否確認をしていたのですが、伊藤さんと連絡がつかないので心配していたんです」

「えええーっ」

うわーん、これは夢じゃないんだ。

仕事で疲れて帰ってきて、これはないんじゃない？ 桐谷さんの頭ボンツで運を使い

果たしたにしても、あり得ない。

だって建物は見事に全焼していて、マンションはどこもかしこも真っ黒焦げ。

ってことは私の部屋にあったものは全部燃えているということだ。

——酷すぎませんか、神様……

「終わった……」

私は手に持っていたスーパールの袋を地面に落とす。

茫然自失の私を警察官が励ましてくれたけど、途方に暮れる。

そのうえ、消火活動は終了しているとはいえ、しばらくマンションは立ち入り禁止になるらしい。一旦どこかに避難願えますか、と言われてしまった。

ずっとここにいっても何も始まらないから、休める場所に移動しなければ。そう思い、ふらふらとした足取りで歩き出す。おそらくこのマンションには二度と住めないだろう。

「はあ……突然家を失うなんてある？」

こんなことが起きるとは、全く想像していなかった。

しかも先月マンションの火災保険の更新手続きが来ていたのに、忙しくて放置していたから何も補償が出ない。

テレビもパソコンも、お気に入りの海外ドラマのDVDも全部失ってしまった。

初の一人暮らしでインテリアにはこだわっていたし、ベッドだって日々の疲れを癒すために奮発して高級ブランドのマットレスを買ったばかりなのに！

冬のボーナス全額を費やしたものが燃えてしまったなんて、立ち直れないほどショックだ。

——わああーっ、悲しすぎる！

今日は桐谷さんに頭を撫でられて、すっごくいい日だったのに、こんなとんでん返しが起こるとは……

今にも泣き出しそうになりながら、これから過ごせる場所を探した。

とにかく今日寝るところを確保しなければならぬ。
最寄りのビジネスホテルに問い合わせるが、あいにくいっぱい入れなかった。そのうえ、別のところを探そうとネットで検索していると、スマホの充電が切れてしまう。

——え……？ あれ？

真つ暗になったまま、全く動かないスマホ。

数年使用している私のスマホのバッテリーは、もう寿命みたいで、すぐに電池が減る。型が古くて合うタイプのモバイルバッテリーを見かけることはほとんどないし、充電器はマンションにあったので、燃えてしまったに違いない。

——うわあ、ますます追い詰められる！

こんなときに連絡手段がないなんて不便この上ない。

仲のいい友達全員離れたところに住んでいる。気軽に行けるような距離でもないし、スマホが使えないから連絡もとれないという状況だ。

急に訪ねて「来ちゃった、テヘ」なんて言ったら迷惑だろうし……

真つ暗になってしまったディスプレイを眺めて深いため息をついたあと、私はとりあえずインターネットカフェに行こうと歩き出した。

——はあ。お腹もすいたし、家もないし……。散々だ。

もう一度桐谷さんに頭を撫でられたことを思い出して、落ち込んでいた気持ちを少し

浮上させる。

桐谷さんは私の心の支えだ。こんな悲しいときでも、彼を思い出すと心が穏やかになるのが不思議。これぞ恋のチカラだな。

先程の黒焦げになったマンシヨンの映像を、爽やかな桐谷さんの笑顔で追いやる。

駅の近くのインターネットカフェに入ると、大学生くらいの男子がフロントに立っていた。

「いらっしやいませ〜」

こういう場所に来るのは初めてなので、どういうシステムになっているのか一通り説明してもらおう。

「どれくらいの時間ご利用になる予定ですか？」

「え、えーっと……」

現在夜の九時。

明日も仕事だし、朝の六時まではここにいたい。そんな長居できるのかと不安になったけれど、幸い朝までここを利用できるプランがあるという。

「じゃあ、そのナイトパックでお願いできますか？」

「わかりました。では会員登録をさせていただきますので、本人確認のできるものがありますか？」

「あ、はい」

免許証など本人と確認できる書類の提出が求められた。

あいにく私は運転免許証を取得していないので、こういうときは健康保険証を提示することにしている。

バッグの中に手を入れて財布を探した。

けれど、財布を取り出しカードケースを見ると、いつも保険証を入れているところに何も入っていない。

——あれ……？　ない。おかしいな、いつもここに入れてるのに………あ！

そういえば会社とある手続きに必要だと言われ、総務課に渡したんだった。

その後返却してもらったのだが、財布を出すのが面倒でデスクの上に置きっぱなしにしたまま忘れてきた。

「あの……本人と確認できるものがないと、会員になれませんよね……？」

「そうですね。必ず必要になっています」

「ですよ……」

まさかの撃沈。

こんな日に限って保険証を持っていないなんて運が悪すぎる！

後ろには入店手続きを待っている人が並んでいる。これ以上粘っていても状況は変わ

らないので、会員になれない私は大人しく退店することにした。

「はあ……もう、最悪だな……」

とことんツイていなくて泣けてくる。こんなに立て続けによくないことが起こると、いつも前向きな私でも、さすがに落ち込んできた。

「うう……これからどうすればいいの……？」

ネットカフェが入っていたビルの入り口でぐすぐすと泣いていたら、通りすがりの人に心配されてしまった。私より年上らしい綺麗な女性が、ハンカチを差し出してくれる。おかげで少しだけ元気が出た。

こうしていても何も始まらない。とりあえず歩き出そう。

一つずつ問題を解決していくのだ。まず会社に一旦戻って保険証を持ってくるしかない。

可能なら、事情を話して会社に泊まらせてもらおうか？　やむを得ない理由なのだから、一日くらい泊めてくれるかもしれない。

来客用のソファは、ごろんと寝転ぶことのできる大きさなので、難なく寝られそうだ。私はずぐぐすと鼻をすすりながら今まで来た道を引き返し、もう一度会社に向かうことにした。

会社に残っている人は、少なかった。別部署の人は何人か見かけたけれど、うちのフロアには誰一人おらず、真っ暗だ。

照明のスイッチを押して、自分のデスクに向かうと保険証を探す。

「あった」

やはりパソコンの隣に置いていた。私は保険証を手にとって財布の中にしまい込む。

——はあ、今からどうしよう。もう一度戻ってインターネットカフェで朝まで過ごすか、ここにいるか。

朝まで会社にいていいか許可を取りたいけれど、私の知っている上層部の人なんてとっくに帰ってしまっていた。他の誰に許可を取ればいいのかわからない。

ふと、こんなときに彼氏がいたらな、と感じる。

彼氏がいたら、「家に帰れなくなつたの」と事情を話して泊めてもらうことができたはず。そして、疲れ切つた心を癒し、優しく慰めてくれたかもしれない。

彼氏の家にお泊まりなんて、憧れのシチュエーションだ。お揃いのパジャマを着て、一緒のベッドで眠って、彼の寝顔を眺めたりなんかしちゃって……

こんな悲惨な状況なのに、私は彼氏がいたらという妄想を繰り返して興奮していた。憧れのシチュエーションはいつだって胸をときめかせてくれる。

一通り妄想を繰り返したあと現実に戻ると、深いため息を漏らした。

「はあ……お腹すいた」

先程スーパーで買ったものは材料ばかりで、すぐに食べられそうなものがない。

空腹のせいもあって力が出ないし、何もしたくなくなる。

もう一度インターネットカフェへ戻る元気もなくなってきた私は、自分のデスクに突っ伏して眠ることにした。

——早く明日になつてくれないかな。

今日の出来事を話したら、みんな驚くに違いない。

朝のつかみとしては抜群のネタだと自嘲して目を閉じた。

「……おい、……おいっ」

「……へ？」

誰かに肩を揺らされ、私は夢の中から現実に取り戻された。

あまりにもぐつすり眠っていたせいで、ここがどこで、今何時なのか全くわからず混乱する。

——えっ、もう朝!?

勢いよく体を起こして周囲を見渡すと、そこは煌々と灯りのついたブランド戦略部のフロアだった。

周囲のデスクには誰も座っておらず、窓から見える空は真っ暗だ。

「あれ……?」

「あれ、じゃない。伊藤さん、なんでこんな時間に会社にいるんだ? もう十一時を回っているぞ」

私を呼ぶ声の主を見上げると、そこには桐谷さんが立っていた。

センスのいいネクタイをきゅっと締めているいつもの姿の彼ではなく、ノーネクタイで胸元のボタンを外したラフな雰囲気。常とは違う彼にドキドキする。

「え……っ、桐谷さん……なぜここに?」

「こっちが質問しているんだけど? まさかこんな時間まで残業していたんじゃないだろうな?」

うちの会社は毎月の残業時間を制限していて、不要な残業はせずなるべく早く退社するようにという社風だ。

こんな遅い時間まで残っていると、必然的に上司に注意される。

「いいえ、残業じゃなく……ここに泊まろうかと」

「は……っ? どうして?」

「え、えーつと……」

「女性が会社に一人で宿泊するなんて、一体どういうことだ?」

私は桐谷さんに問い詰められる。

確かにこんなことをしようとする人なんて、ごく稀まれだと思う。

私は自宅マンションが火災にあって行くところがないのだ、と説明した。

「友達に電話しようにも遅い時間ですし、何よりスマホの電源が落ちてしまっって連絡先がわからなくて」

「ご両親は?」

「両親は早期退職をしていて、離島に引っ越しちゃったのでこの近くに住んでいないんです」

私の親はとても仲がよく、早期退職した父は母と一緒に人口の少ない離島で自給自足生活を楽しんでいる。

一度だけその新しい実家に足を運んだことがあるけれど、小屋のような簡易な家でのサバイバル生活に圧倒された。「私にはこんな生活絶対できない……!」と愕然がくえんとなったのを覚えている。

そういうわけで、実家はないに等しい。

「不躰がらで悪いんだけど、付き合っている人は?」

「いません」

「……そうなんだ……」

恋人はいないと私が答えると、桐谷さんは口角を少し上げて、ニヒルな笑みを浮かべた。その表情がゾクリとするほど色っぽくて驚く。

普段の彼は決してこういう表情をしない。どちらかというと同派な印象の人だ。優しいけど、女性社員とは一定の距離を保っていて、うわついた話は一切しない。

「仕事中はもちろん、飲み会の席でもだ。」

「……伊藤さん、彼氏いないの、どれくらい？」

それなのに、今日は妙に掘り下げてる。

しかもさつきよりも距離が縮まってきていて顔が近い。

こんな近距離で桐谷さんを見たのは初めて……。均整のとれた涼し気な顔が、私をまっすぐ見つめている。

しかし、なんでこんなことを聞いてくるんだろう。もしかして元カレのところに泊まらないかと考えているのかな？

「え、つと……今まで、一度も……」

「え？ ……ホントに？」

「はい。残念ながら、本当なんです……」

——もしかして引かれた？ 誰とも付き合ったことがないなんて、女性としての魅力がない証拠……だよな。

残念な女子だと思われたんじゃないか、どこにも泊めてもらえそうな場所がなくて厄介だと感じたんじゃないか、と落ち込んでみると、意外にも桐谷さんは笑みを深めた。

「ふうん、そうなんだ。ごめんね、いろいろ聞いてしまって。男性に慣れていない感じはしていたけど、まさか誰とも付き合ったことがないとは思わなくて。いいね、そういうの」

——いいの？ こういうの。

二十五歳にもなって誰とも付き合った経験がないって、コンプレックスを抱いているのだけ。褒めてもらえるなんて思ってもいなかった。

桐谷さんにそう言ってもらえるなら、今まで恋人がいなくてよかった。

「……それで、行くところがないから、会社に泊まろうと考えたの？」

「はい。インターネットカフェに行くのも面倒で……このままここで寝ちゃって……」

「女性なのに不信心だな。何かあったらどうするつもり？」

会社は安全な場所だ。事件になるようなことは起こらないはずだけど……不思議に思っていると、桐谷さんが呆れた顔で私を見つめた。

「襲われたらどうしよう、とか思わない？」

「あはは、そんな大げさですよ。私、誰からもそんな対象に見られていません」

「……はあ」

桐谷さんの質問に即答すると、彼はため息をついて胸の前で腕を組んだ。

「女性なんだから、気をつけないとダメだろ。対象に見られていないなんて、君が勝手にそう思い込んでいるだけだ」

「……そうなんでしょうか？」

「そうだ」

だったら一度くらい恋人ができたっていいのに、と悲しく思う。

でも、こうして桐谷さんに女性として心配してもらえたのは、嬉しい。桐谷さんの目には一応、私も女性として映っていたということだから。

「ありがとうございます。気をつけます」

「伊藤さんって本当に危なっかしい。自覚がないところだから困る」

「え？ 今、なんて……」

「なんでもない」

桐谷さんの声が小さくて聞き逃してしまった。

とにかく今日は散々な一日だったけど、こうして終わりにまた彼とお話ができて、よかった。

「——それにしても、桐谷さんはどうしてここに？」

「たまたま会社の前を通りかかったら、こんな時間なのに、うちのフロアに灯りが点い

ているのが目に入ったんだ。気になって来てみたら伊藤さんがいた」

「そうなんですか……すみません」

明日休みを取っているというのに、余計な手間をかけさせてしまっって申し訳ない。私は、反省して頭を下げる。

「私は大丈夫です、お疲れさまです。気をつけて帰ってくださいね」

「いやいや、伊藤さんを残して帰れないだろ」

「私は本当に大丈夫ですから、気にせず帰ってください。電車もなくなっちゃいますよ」置いて帰れない、大丈夫です、のやり取りを何往復か繰り返したあと、桐谷さんは痺れを切らしたようで、私の手首を掴んだ。

「ああ、もう！ 俺の家に来い」

——えっ。今、なんて……？

「俺の家はここからそんなに遠くないし、泊めてやれるスペースもある」

桐谷さんの言葉を聞いて、私の胸が急に大きく鳴り出した。

——嘘でしょ？

桐谷さんにそんなことを言ってもらえるなんて信じられない。これは夢？ それとも私の妄想……？

だってあの桐谷さんだよ？

女性社員を全く寄せ付けないことで有名な部長、桐谷貴之さんだ。

それにしても、「俺の家に来い」だなんて、ステキな響き。

いつも優しくして紳士的な桐谷さんに似つかわしくない、強引さを感じさせる。この一言だけで腰が砕けて歩けなくなりそう。

「行くぞ」

彼のギャップにドキドキしていると、ぐいっと引つ張られる。私は立ち上がった勢いでそのまま歩き出し、あれよあれよという間にタクシーに乗り込んでいた。

「いや、あの……ですね、私……」

トキメキのあまり、ぼうっとしていたけれど、桐谷さんの家にお邪魔するなんて申し訳ない。

こんな時間だし、明日は休暇を取られているのに。休日の前の夜っていったら、一番テンションの上がるときじゃない。

その楽しい時間を私のせいで奪ってしまうなんて……と恐縮してしまふ。

それに、彼女とかいたりしないのかな？

毎月休むくらいだし、恋人と過ごしているのではないかと勝手に想像していた。

「まさか男の家に行くのも初めて？」

「……はい」

あ、まただ。隣に座っている桐谷さんは、彼氏がいないと言ったときと同じ表情をした。暗くてよく見えないけれど、色っぽいのに何か悪巧みわるくさくをしているような笑顔。

——そんな顔を見たら、ドキドキが止まらないよ。

いつもの桐谷さんじゃないみたいだ……。勤務時間外だから、そう思うだけ？

妙に色っぽいっていうか、エロ度が増しているっていうか……とにかく格好いいことに変わりはないんだけど。

さつきから、胸が壊れそうなほど高鳴っている。

まずい、断る気がなくなってきた。本音を言えば、彼の家に行ってみたい。

——桐谷さんの家ってどんな感じなんだろう？

そもそも男の人の家というものに足を踏み入れたことがないので、わからない。海外ドラマやネットで見たことがあるくらいだ。

貧しい想像力であれこれ想像して胸を躍らせている途中、ふと我に返る。

——ん？ こんな時間に男の人の家に行つていいものなのかな？ 夜に男女が部屋に

二人きりって、何か起こるシチュエーションだよな？

あー、でも相手は桐谷さんだ。

部下に手を出すなんてあり得ない、真面目な人。そもそも、あれほどたくさん女性の社員に告白されても相手にしない人が、毎日顔を合わせる私に手を出すはずがない。

「着いたよ」

いろいろ考えているうちに、桐谷さんのマンションの前に到着していた。タクシーを降りると、目の前にはオシヤレなデザイナーズマンションがそびえ建っている。

「うわあ……オシヤレ……」

「俺の友達がデザインしたマンションで、去年の冬に引っ越してきたんだ」

「すごい友達ですね……!」

新築のようで、外観も内装もとても綺麗だ。外壁はコンクリートの打ちっばなしで、エントランスはガラス張りになっている。

夜中に押し問答するのも気が引けて、私は促されるまま桐谷さんの家に入った。

部屋の中は、さすがデザイナーズマンションと言いたくなるようなハイセンスな家具が置かれている。しかも、利便性を兼ね備えていた。

「桐谷さんのおうち、広いですね……」

「ここ、ファミリー向けみたいだからね。一人にしては広いよな。仲のいい奴に頼まれたから、買ったんだ」

なんて友達思いなんだろう。桐谷さん、ステキ……!

すつきりと片付いている部屋を見渡す。モテ要素がありすぎて戸惑ってしまう。

もともと格好いい男性としての魅力が溢れている人なのに、こんな部屋に住んでい

るなんてモテに拍車がかかってしまう。

恐ろしいほどに高嶺の花であることを再確認した私は、桐谷さんのほうに目を向けた。ぱっちり目が合う。

「手に持っている野菜、冷蔵庫に入れる?」

「あ……はい!」

桐谷さんにスーパリーの袋を手渡すと、大きな冷蔵庫の中に収納してくれた。それを見ていたせいか、私のお腹が凄まじい音を立てて鳴る。

「……ふふっ。お腹すいてるの?」

「あ、……はは。何も食べていなくて」

「いろいろ大変だったもんな。適当に作るから待ってて」

——えっ! いや、そんなの悪いです!

そう思いながらも、口には出せない。「私のために料理してくれるんですか、桐谷さんの手料理食べたい!」という正直な気持ちも湧いてきてアタフタと焦る。

あわわわ、と立ち尽くしている間に、手際よく料理が行われ、ダイニングテーブルの上にフレッシュサラダとトマトクリームパスタが並んでしまった。

「わああーっ、すごく美味しそう!」

「家にあるもので作ったただだから、あまり期待しないで」

「すごいです、桐谷さん！」

料理もできるとは、知らなかった。こんな一面を知ることができて嬉しいのと同時に、目の前に並ぶ料理に感動する。これを食べてもいいなんて、幸せすぎる〜っ。

「どうぞ、召し上がれ」

「では、遠慮なく……いただきます！」

私はついがつついてしまった。

お皿や盛り付けも完璧だし、もちろん味もお店で食べるものみたいに美味しい。

格好よくて料理もできるなんて、桐谷さんはどこまでもパーフェクトな人なんだ。

「誰かにご飯を作ってもらえるなんて、すごく幸せですね。嬉しい、美味しいーっ」

「大げさだな」

「大げさじゃないですよ。本当のことです」

一人暮らしだと、自分で用意をしなければ食事は出てこない。お母さんのありがたみを実感する日々だったけれど、こうして好きな人に作ってもらえるなんて……本当に夢のよう。

私は、あつという間に完食してしまった。

「ごちそうさまでした、とても美味しかったです！」

「いい食べっぷりだったな」

残すなんていう選択肢はないので、全部平らげた。

大食いだと思われちゃったかな、と不安に思っていると、桐谷さんが私のほうに近づいてきた。

「……ついでる」

「え……？」

桐谷さんの指が私の唇に触れる。

じつと見つめられたまま形を確かめるように指先でなぞられ、私の体が震えた。

右側の口角についていたソースを拭^{ぬぐ}ってくれたようで、指はすぐに離れ、にこっと微笑^{ほほ}みかけられる。

——キスされるのかと思った。

誘うみたいな色っぽい表情でじつと見つめられて、私は動けなかった。

いつもの桐谷さんからは想像ができないくらい、大人の色気が溢^{あふ}れる意味深な瞳に、期待しそうになる。

つい勘違いしたくなる自分に、それは間違いだと言いついて聞かせているうちに、桐谷さんは私から離れた。

「じゃあ、部屋の案内をするよ」

「……はい」

リビングダイニングに、桐谷さんの部屋、それからバスルーム、洗面所。トイレや寝室を見て回る。中に空き部屋が一つあった。

「マンションが火事になったってことは、しばらく住むところがないってこと？」
「……まあ、そうなりますね……」

どれだけ急いだとしても、次の部屋を探すまでには数日はかかる。

両親に保証人になってもらう場合は、離島に書類を送らなければならない。それを返送してもらって……と計算していると、桐谷さんが話を続けた。

「——うちに住めば？」

「え……？」

——えーっ!!

一瞬、彼の言葉が理解できなくて固まる。しばらくして意味がわかると、驚きのあまり腰を抜かしそうになった。

今、さらつと言ったけど、桐谷さん、私にここに住んでいいよって言ってくれた？

まさかね、聞き間違いだよな。

聞き返す前に、もう一度同じ言葉が聞こえてくる。

「部屋が見つかるまで……いや、探さなくていい。ルームシェアしよう」

「ええええっ！」

——ルームシェア!?

ルームシェアって、一緒に住むってことだよな？ 私と桐谷さんが、ここで一緒に住むの？ 同じ屋根の下で生活するってこと？

うっそだあ、桐谷さんからそんなことを言われるなんて、現実では起こらない。火事のショックで気が動転していて、私、現実と妄想の境目がわからなくなっちゃったんだ。女性に対してものすごく分厚い壁を築いている桐谷さんが、一緒に住もうなんて言うわけないもん。

やだなあ、私ったら。

「——伊藤さん、聞いてる？」

「へえっ!？」

「その反応は、聞いてないな。この家、ファミリー向けってのもあつて部屋が余っているし、正直、持て余しているんだよ。広いぶん家事に手を取られるし、ちようど一緒に住んでくれる人を探そうとしていたんだ」

桐谷さんは、にっこりと笑った。

「伊藤さんって毎日お弁当を作ってきているよね。いつ見ても美味しそうなものを詰めているし、料理上手でしょ。デスク周りもいつも整理整頓しているから掃除も得意だよな」
まさかお弁当の中身を見られていたとは、恥ずかしくなる。前の日の夕食の残りもの

を詰めているだけなのに。

事態についていけない私を置いて、桐谷さんは話を続ける。

「伊藤さんがいてくれると助かるんだけど——上司と住むのは嫌?」

彼がすぎるような目で見てきた。そんな表情もやっぱり色気が溢れて……

「そんなことは全くないです! けど、一緒に住むのは、いろいろとご迷惑になりますし……悪いかなって」

私は焦って答えた。

——嫌なわけではないじゃないですか!

私は桐谷さんのことが好きで、毎日会社で顔を合わせるだけで嬉しいのに、家に帰っても桐谷さんに会えるなんて、この上ない幸せだ。

こんなに幸せなことが起きていいのって、いいことづくめで逆に怖くなるくらい。

よくドラマや恋愛小説で「私……幸せすぎて怖いの」って言っているヒロインがいるけれど、その気持ちは今ならよくわかる。

「俺は迷惑じゃないよ。むしろ一緒に住んで家事を分担してくれたら、すごく楽になって嬉しいんだけど」

「う……」

桐谷さんはぐいぐいと迫ってきて、私は壁際に追いやられた。逃げ場を失った私は、

近づいてくる桐谷さんに胸の高鳴りを抑えきれなくなってしまふ。

「ダメかな?」

「いえ……そんなことは……」

「じゃあ、いいよね?」

これ以上近づかれたら、キスしてしまうんじゃないかというほど間近で尋ねられ、私はこくこくこくと何度も頷いて承諾した。

——今日の桐谷さん、いつもより強引じゃない?

こんな人だったっけ? それともプライベートではこんな感じなのかな?

「よろしく、伊藤さん」

「……はい、よろしくお願ひします」

こうして私と桐谷さんはルームシェアをすることになった。

いつも会社で顔を合わせている上司、しかも好きな人と一緒に住めるなんて、世の中何が起こるかわからない。

捨てる神あれば拾う神あり、とはよく言ったものだ。

それから再び部屋の説明をしてくれたあと、桐谷さんはなぜか用事があるからとマンションを出ていった。

「はあああ！」

誰もいなくなつた部屋で蹲り、私は声を漏らす。

本人がいなくなつたとはいえ、ここは桐谷さんの家だ。

どこを見てもプライベートルームな空間で、いつもこの部屋で彼が過ごしているのだと思うと落ち着かない。

「どうしよう、本人もだけど部屋もステキすぎる。ここで朝まで過ごすなんて、私どうにか頑張ってしまおう……」

あまりの興奮で鼻血が出るんじゃないかと心配になつたので、落ち着こうと深呼吸をする。

それにしても、桐谷さんは、どうして私を同居人を選んでくれたんだろう？

——もしかして、もしかして！ 実は脈ありだったりして？

『伊藤さん、実は俺、前から君のこと……』

背景にバラを背負つた桐谷さんが私に向かって告白しているシーンを思い浮かべて、私は「きゃああ」と声を上げながら顔を両手で覆つた。

「ないない、それは絶対ない」

不慮の事故にあつた私は、よほど悲壯感を漂わせていたに違いない。優しい彼は、私

に同情したのだろう。

自分でもこれはないんじゃないと思うくらい、不幸な出来事に見舞われているもん。

ああ、でも、私のことをほんの少しでもよく思つて、この同居話を出してくれていたのだとしたら、すごく嬉しいのに。

桐谷さんに釣り合うような女性じゃないとわかつているものの、淡い期待に胸を弾ませる。

——ちよつとだけ妄想して喜ぶくらいなら、許されるよね……？

ところで明日が休みとはいえ、桐谷さんはどこに出かけたのだろう。

部下ではあるものの、赤の他人に近い私一人を部屋に残してどこかに行ってしまうなんて、よほど大事な用事なのだろう。

そんなことを考えていたらなかなか興奮が醒めず、気がつけば深夜一時を回っていた。そろそろ寝ないと明日の仕事に影響が出そうだ。

とにかく寝る準備をしないとイケないので、お風呂を借りることにした。桐谷さんの普段使っているボディソープを借りて、ドキドキしながら入浴を済ませる。

そして、恐れ多いと思いつつ、桐谷さんの部屋へ向かった。

今日は桐谷さんのベッドを使うよう言われている。綺麗に整えられたベッドの上に乗ると、柔軟剤のいい香りがした。

「ひーん。桐谷さんのベッドだよーっ」

毎日ここで寝ているんだよね？ このお布団を使っているんだよね!?

ああ、もう……眠れるかな。好きな人のベッドで眠るなんて、緊張する。

ドキドキしながら布団の中に入って、深呼吸した。

ああ、気のせいか空気で美味い……。恋愛経験ゼロのこじらせ女子なので、こんな残念な思考の私を、どうかお許しください。

私は神様に謝って、目を瞑った。

——翌朝。目を覚ましても桐谷さんの姿はなかった。

桐谷さん、まだ帰ってきていないんだ……

寂しいけれど、私を泊めるために気を使っただけの外泊かもしれない。感謝しなければ。

絶対に寝られないと思っていたのに、昨夜はベッドに入っただけで寝てしまった。ふかふかの羽毛布団に包まれた心地いい眠りだ。

桐谷さんに抱かれた気分……なんてうっとりしながら壁かけ時計を見ると、予想以上に時間が過ぎている。

「やばっ！ 急がないと」

私は急いで出勤の準備に取りかかった。昨日と同じスーツで出勤することになるけれ

ど、仕方ない。

今日、仕事が終わったあとに何着かスーツを買いにいこう。それから携帯電話も機種変更したほうがいいかもしれない。いろいろと揃えないと。

失くしたものは多いけれど、心機一転、一から始めよう。くよくよしたって仕方がない。

火事のおかげで桐谷さんと一緒に住めることになってラッキーなんだと前向きに捉えることにした。

その日の夜、昨晚渡されていた合鍵を使って桐谷さんの家に帰ると、玄関に彼の靴が並んでいた。

——桐谷さん帰っているんだ。よかった。

「ただいま戻りました……」

「おかえり」

玄関から廊下を進むとリビングに繋がっている。桐谷さんは、そのリビングにある大きなソファに座り、メガネをかけて読書をしていた。

ラフな感じの私服を着ていて、いつもと全然雰囲気が違う。

またしてもギャップにドキドキしていると、桐谷さんは文庫本を閉じて立ち上がった。

「昨夜は強引に家に連れ込んでしまってますまない」
 「え……。いや、そんな。こちらこそ、ご迷惑じゃなかったですか？ いきなりお邪魔してしまつて……」

「いや、それについては全く問題ない」

——あれ？ 今日はず段の桐谷さんっぽい。

会社にいるときと同じ距離感で話をしてくれていて、やはり昨夜の彼はいつもと違ったのだと思わせた。

聞かなかつたけど、お酒を飲んでいたのかもしれない。酔っていたからあんなふうには積極的というか、強引な感じだったのかも。そう考えていると、桐谷さんが言いづらそうに口を開く。

「ルームシェアをお願いした件だけ」——

その言葉に、私は身構えた。

——やっぱり、なかつたことにしてくれて言われる？

「承諾してくれていたが、本当にいいのか？」

「え……。あ、はい。私は……大丈夫です……が……」

「しかし俺と住むということは、その……男と住むということで……不便なことはないのか？」

私に不便なこと……？

それが具体的にどういうことかわからないのですぐに返事ができない。すると、続けて桐谷さんが話す。

「たとえば……誤解されたら困る相手がいるとか」

遠まわしに言ってくれているみたいだけど、要は好きな人がいないのか聞きたいのだろう。現在彼氏がなくても、そういう人ができたときに、桐谷さんの家に住んでいると知られて困らないのかと、心配してくれているみたいだ。

「大丈夫です！ 昨日も言いましたが、私、彼氏いませんから。誤解されて困るような人もいません」

胸を張って言うことでもないんだけど、本当のことだ。好きな人はいるものの、それは目の前にいる桐谷さんだから、誤解される心配はない。

「……そうか。ならいいんだ……」

「私のことより、桐谷さんこそ本当にいいんですか？ 恋人はいらっしゃらないんですか？ 私がここに住んで大丈夫なんでしょうか」

「ああ、大丈夫だ。俺もそういう相手はいない」

それを聞いて、私はホッとした。

——よかつた、彼女いないんだ。

だからといって、私に可能性があるってでもないけれど、恋人の存在を桐谷さんの口から告げられたら、相当ショックを受けるだろう。

「男女で一緒に住むってことは、それなりに気を使わないといけないけど、それでも大丈夫？」

「あの……絶対に迷惑をかけないようにします」

「あ、いや、俺に気を使ってくれてことじゃないんだ。そうじゃなくて、風呂とかトイレとか共同だから大丈夫か心配で。嫌じゃないならいいんだけど……」

「私は大丈夫です、気になりません」

結構気にしてくれているんだな、と嬉しくなる。

「なら、よかった。恋人でも友達でもない。俺たちは上司と部下だ。でも家に帰ってまで気を使い合っていたら疲れてしまうだろう。伊藤さんが過ごしやすいように二人でルールを決めよう」

「はい！」

そして、私たちは様々なことを話し合った。

この家は二人のものと考え、生活費を出し合う。

家にいるときは上司と部下ではなく、よって敬語じゃなくてもいい。もともと、これはさすがにできそうになかった。ただ、そういうふうに言ってもらえたことが、距離が

縮まったみたいで嬉しい。

その他、基本的に食事は個々でとることにするが、時間が合うときは一緒に食べる。

それぞれ自分の部屋を設けて、互いの部屋には入らないようにする。もし入室するときは、相手がいるときに、なおかつ許可を取ってからにすること。

入浴は時間がかぶらないよう、毎日私が早めに入る。

そんな感じで細部までルールを決めて、心地よく共同生活を送れるよう協力し合うことになった。

桐谷さんとは仕事上の付き合いが長いし、いつも彼を見ているから大体の性格は把握しているつもりだ。

だから上手くいくような気がする。

「じゃあ、今日からよろしく」

「はい、こちらこそ。よろしくお願ひします」

今日から本当に二人の生活が始まる。

——会社には内緒のルームシェア。

緊張するけれど、誰よりも好きな人の近くにいられるのだから頑張ろう。私はそう誓った。

私、伊藤菜々は同じ部署の上司である桐谷貴之さんとルームシェアをしています！彼と住みはじめて、かれこれ二ヶ月が経過した。最初は憧れの上司との同居に緊張しまくっていたのだけど、少しずつ慣れてきている。

もちろん、妄想していたようなハブニングなど起きず、いたって健全な同居だ。

「おはよう」

「おはようございます」

朝の支度がある程度終わらせてリビングに向かうと、すでに桐谷さんがいた。

彼に寝起き姿を見せたくない私は、リビングに向かうときにはメイクを済ませてスーツを着て、いつでも出社できる格好になっている。

朝と一緒に食事をとることが多く、たいいてい私より早く起きている桐谷さんが、私のぶんまで作ってくれた。

今日テーブルに並べられているのは、このマンションの近くにあるサンドイッチ専門店「ハムサンド」だ。サラダと目玉焼きを添えてある。

そして桐谷さんが作ってくれたピシソワーズまで出てきた。

最高の朝食に、私は目を輝かせる。

「わあーっ、ピシソワーズだ！嬉しい」

「この前作ったとき喜んでいたので、また作っておいたんだ」

「ありがとうございます！ いただきます」

朝から元気な私は、桐谷さんが作ってくれたものを、喜びながらあつという間に完食する。一方、桐谷さんは私の向かい側に座り、新聞を読みつつコーヒーを飲んでいた。

家事を分担する同居人として私が抜擢はつてきされたはずなのに、蓋ふたを開けてみると、食事はほぼ桐谷さんが作ってくれている。

一緒に住ませてもらって、ご飯まで用意してもらうなんて、私、どれだけ甘やかさ
れているんだろう。

申し訳ないから自分もやると言うたびに、「美味おいしそうに食べてくれるから、つい作ってしまうんだ。食べてくれると嬉しい」なんて言う、彼のイケメンっぷりにやられる。

——ああ、桐谷さんのこと、ますます好きになってしまっ……

私は心を落ち着けて、彼に話しかけた。

「——桐谷さん、明日はお休みの日ですよね」

「ああ」

相変わらず月に一度、有休を取っている桐谷さん。
先月も、先々月も、その日は前の晩から外泊して、朝になっても帰ってこなかった。
今日も、きつとそうなのだろう。

「今日は仕事が終わったあと、そのまま行くところがあるから帰らないつもりだ」

「そうですか、わかりました」

「戸締りをしっかりするように」

「はい」

彼が毎月決まって外泊するので、どんな用事なのか気になっている。

恋人はいないっていついていたけど、やっぱりいるんじゃないかな？

恋人じゃないとしても、一晩過ごすような相手がいるのかもしれない。

真相はわからないけど毎月この日が来ると、私は少し落ち込んだ。別の部屋で過ごしているとはいえ、同じ屋根の下に桐谷さんがいないのは寂しい。

でも、ただの同居人、ただの部下がプライベートを詮索するわけにはいけないので、私は追及ができていない。

「……はあ」

昼休みの終わり。早めにランチを終えた私は、情報管理部からもらった顧客アンケート

の資料を見つめながら、自分の席で深いため息をついた。

ため息の理由は、私が担当している新商品Punchの感想についてはない。桐谷さんの外泊についてだ。

すると、後ろから話しかけられる。

「伊藤さん、どうしたの。ため息なんかついちゃって」

「あ、鈴木さん。お疲れさまです」

鈴木浩史さんは同じ部署の先輩で、後輩の面倒をよく見てくれる頼りになる人だ。

明朗快活で、裏表のないまっすぐな性格をしている。とても接しやすくってなんでも相談できるので、みんなのお兄ちゃん的存在だ。

「なんでもないですよ。Punchの売り上げ、もっと伸びないかなーとと思って」

想い人である桐谷さんが月に一度外泊することを気にしているのだとは言えず、私は仕事の話にすり替える。

彼と一緒に住んでいるなんて絶対にバレてはいけない。

「じゃあさ、イベントでも企画してみたら？ 僕が担当している酎ハイがリニューアルしたとき、商業施設の特設会場でイベントしたんだけど、結構いい反応で話題になったんだ」

自分の経験した話を交えながら過去のイベントの資料を貸してくれ、鈴木さんは私の